

評価委員会総合評価

研究課題名：B6 南海トラフ沿いのプレート間固着状態監視と津波地震の発生状況即時把握に関する研究

評価委員

委員長：小泉尚嗣

委員：佐竹健治、関口渉次、泊次郎、渡辺秀文

評価年月日：平成30年9月14日

1. 総合評価

- (1) 継続の可否 ☒ 継続 ☐ 中止
(2) 修正の必要の有無 ☐ 修正の必要あり ☒ 修正の必要なし

2. 総合所見

本研究は、研究成果によってすぐに地震予測が実現できるものではないが、地震発生メカニズムの理解を深化させることによってやがて地震予測につながるという王道的なスタイルの研究である。

本研究により、多項目にわたる具体的な目標に対する研究が着実に進展し、実運用に資する結果が出ていることは高く評価できる。南海トラフ地震に関する研究では、スロースリップ・低周波微動・地震発生シミュレーションなど、網羅的に各種課題に取り組み、それぞれ着実に成果を上げつつある。また、津波地震即時把握に関する研究についても着実に進展していることは社会的な意義がある。プレート間固着状態監視技術の高度化については、スロースリップや深部低周波地震の発生を捉えるさまざまな手法が高度化され、これまで知られなかったスロースリップや低周波地震の存在を明らかにした。このことは大きな成果である。

しかしながら、「スロースリップや低周波地震発生が、将来の大地震の発生という観点から見てどのような物理的意味を持つのか」についての研究は十分進んでいない。

なお、今後に向けて、以下の指摘事項を踏まえて、取り組んで欲しい。

- ・他の研究課題の研究成果を適用しつつ、南海トラフの地震発生ポテンシャルの定量的把握に引き続き努めて欲しい。
- ・「南海トラフ地震に関連する情報」に関する評価検討会との関係性は理解できるが、副課題2の即時的地震像把握手法の開発は、B2やB3課題と密接に関連しており、これらの課題の後継課題と併合した方が良いのではないかと。
- ・中央防災会議防災対策実行会議において報告された典型的ケースが発生した際には気象庁や地震研究者が何らかのコメントを求められる事は間違いないので、可能な範囲で典型的なケースを意識しつつ研究を進めるのが望ましい。ただ5年や10年の研究で結論が出るものではない事にも留意する必要がある。

- ・「物理的背景（プレート間固着域の状態変化）に関する説明能力の向上を図る」ための研究にも今後は力を入れて欲しい。